

## 平成25年度多摩地域自立支援協議会交流会

### 【第一部】話題提供（概要）

#### テーマ「障害者総合支援法の相談支援と地域自立支援協議会に期待すること」

#### 話題提供1 東大和市自立支援協議会会長 海老原 宏美氏

今日は、東大和市における障害福祉の状況と、そこでの協議会がどんな活動をしているか、どういう考え方で活動しているかについて、お話をさせていただきたい。

私は今、自立生活センター東大和というNPOで活動している。ふだんは相談支援事業や権利擁護の活動、ピアカウンセリング、自立生活プログラムなどを中心に仕事をしている。

私が東大和市で自立生活、ひとり暮らしを始めたのが12年前。

東大和市は人口8万5,000人、6,000人ぐらいの小さな町。12年前に私が転入して来たとき、ひとり暮らしを始めるということで、住宅改修の申請をしたり、ヘルパー利用の申請をしたり、手当や年金の手続に行ったりと、市の窓口に行くことが多くあった。

障害福祉課の窓口に行くと、担当のケースワーカーの方が、ほとんど赤ちゃん言葉のような感じで、私をすごく子供扱いしたのが印象的だった。私はそのとき24歳だったが、そういう雰囲気ではびっくりしたのを覚えている。

今でもまだまだ東大和市は、障害福祉については保守的な地域なのかなという印象を持っている。少しずつ変わってはいると思うが、当時12年前は、障害者やその家族、支援者の人たちは、何か生活の中で困っていることがあると、「私たちはこういうことが大変なんです、申しわけないけれども、こういうことを助けていただけませんか」と行政に訴える。それに対して行政側は、「じゃあこういうことをしてあげましょう」というような、「やってあげる」、「やっていただく」という関係性が強いのかなという印象を、私は強く持った。

今でも障害者とかその家族は、親が障害を持った子供を最大限まで頑張って家の中で介護して、地域の中で生活し、どうしても介護できなくなったら、もう施設に行ってしまうのは仕方がないという流れが、まだまだ根深く根強く残っているのかなという感覚がある。

そういう雰囲気の中で、私が突然現れてひとり暮らしを始めた。自分で言うのも変だが、私は重度障害者の中に入ると思う。24時間に近い介助を使い、人工呼吸器を使っている重度の障害者が、親に面倒を見てもらうわけではなく、家族に助けてもらうわけではなく、ヘルパーを使って自立生活をする。一体この人は何だろうか、とんでもない人が東大和に現れたということで、当時の障害福祉部署が、すごく警戒態勢を整えたと聞いている。

自立生活センターは、権利擁護運動などの活動をしているので、行政と対峙してしま

うことがある。障害者の権利が守られていないと言って、乗り込んで行って交渉したり、場合によっては、座り込みや泊まり込みをしたりすることもある。自立生活センターは全国に120カ所くらいあるが、そういう活動をしているところもたくさんあるので、きっと東大和もそういう目に遭うに違いないと思ったんだろう。

私は、もちろんそういう活動をしていく必要がある場合もあるとは思う。しかしそれよりも、どうして私たち障害者の生活のことを分かってくれないのかとか、こんなに困ってるのに、どうして必要なサービスを出してくれないのかということを考えてときに、自分たちの権利を主張して、押し通していくのではなく、その背景にある理由や根拠をしっかりと理解しなければならないと思っている。だから、相手の話をなるべく聞いて、何がそんなに難しいのか、一生懸命に協議していきたいという気持ちのほうが強い。

行政にしかできないこともあり、行政にできることとできないことがあると思うが、同じように市民側にも、できることとできないことがある。お互いのできること、できない部分を補完していく姿勢が必要といつも思っている。

差別や偏見とか、サービスが足りない、出してくれないということは、ほとんどの場合、悪意を持ってやっているわけではない。「やってあげます」、「やっていただきます」という姿勢の裏にも、悪意ではなく、本当にシンプルに、守ってあげなければいけないのではないのかという誤解からきている。

私たちは権利の主体であるはずなのに、保護の対象としか見られていないという背景には、さまざまな先入観などがあるはずなので、それを一つ一つ解消していく活動をしていきたいとずっと思いながら、東大和で自立生活を送ってきた。

お互いにできることできないことを見極めていきませんかという気持ち、姿勢で、そのことを伝え続けながら生活をして、8年目の2009年、東大和市の自立支援協議会が立ち上がった。立ち上がった当初から、私は会長職をさせていただいている。東大和に転入してきたころに、あれだけ警戒された人物が、会長という地位につくということに、私は本当にびっくりした。ありがたいお話で、一緒に自立支援協議会をやっていきましょうというお声がけをいただいた。

東大和市の自立支援協議会の活動目的や委員の構成は、至って標準的なものになっている。専門部会は、現在は、就労部会と生活部会の二つしかない。

それ以外に、協議会委員の有志で、週1回社協の場所を借りて、相談窓口を開設している。本来、自立支援協議会は、相談支援事業所が中心になって、自分たちが関わっている相談ケースの中で難しい、いわゆる困難事例と言われるものを、自立支援協議会につなげて、さまざまな支援機関と一緒にその解決策を協議していく組織だと思うが、東大和市には、委託を受けている相談支援事業所が一つしかない。

その一つが、精神障害に特化している相談支援事業所なので、身体と知的障害を扱える相談支援事業所が、まだ委託としてはできていないという状況。

数年後に建設予定の総合福祉センターの中に、委託事業所が入る予定だが、今現在は

ない。そこで、その委託事業所ができるまでの数年間、自立支援協議会の委員で、相談というものをつなげていこうということで立ち上げている。東大和市独自の機関になっている。

全体会等は、年4回開催している。専門部会は、ほぼ隔月の頻度で開催している。

自立支援協議会の存在意義を考えたときに、障害を持った方やその関係者の方々が地域生活を送る上での困難やニーズを、いかに積み上げていけるかが重要になってくると思う。

障害福祉サービスを使っている方は、その事業所の方たちがどこかでつながって、この人は生活の中でこういうことの困っていそうだとということをキャッチできるかもしれない。しかし、何もサービスを利用していない人も市内にはたくさんいて、その人たちが相談する場所がない場合に、困っていることを困ったままにしている可能性がある。

また、東大和市の今までの状況を見てみると、なかなか声を上げにくい環境がある。例えば障害福祉課の窓口で、「こういうことに困っているんです」と伝えに行っても、「今あなたのニーズを満たせるような資源とか、サービスはないですよ」と言われて、そこで終わってしまっている。

今私はこういうことが大変だけれども、それを我慢したまま行かなければいけないと、そこで止まってしまっているケースは、多分たくさんあると思う。一度、何もできませんと言われてしまったら、別のところに聞いてみようと思うのは非常に労力がいる。我慢できるうちは限界まで我慢しなければいけないと思って、そこで止まっているケースがたくさんあると思う。自立支援協議会としては、できればそういう人たちのニーズをしっかり拾い上げていきたいと思うが、なかなかそのつながりを持ってないままになっている。

先ほど話した有志の相談窓口も、そういう人たちのニーズをどこかで拾い上げられたらと思って立ち上げたが、窓口を作って待っているだけでは、つながることはすごく少ない。

そこで、この有志の相談窓口では、今アウトリーチ活動として、市内の障害団体、障害支援関係グループ、関係者の団体などに、自分たちから出向いて行っている。お茶を飲みながら、普段どんな生活されてるんですかとか、何か困っていること、大変なことはないですかとお話を聞く活動も、少しずつ始めている。

困っている人はどこにいるのか、どういうことに困っているのか、ということや、どうすればさまざまな機関から協議会につなげていけるのか、今その仕組み作りを試行錯誤している。

24年度から計画相談が始まった。この会場には、計画相談の指定事業者になっている方はどれぐらいいらっしゃいますか。計画を作っている皆さんはお分かりかと思うが、本当に大変。事務量も増えるし、時間もかかる。初めてお会いする方もたくさんいるが、

その人たちの生活状況などを一から聞く。でも初対面の人にいきなり、私はこんなふうに生活で困っているなどなかなか言えない。だから、初回の面談だけでは、その人の生活のニーズを本当に聞き出すことは絶対にできない。面談を重ねたり、モニタリングを重ねていく中で、信頼関係ができていくとは思いますが、お金の話で言えば、全然採算が取れない事業だと思う。

私のセンターでも計画を作っているが、何でこんな大変な事業が始まったのかと思うこともあった。

しかしその大変な計画相談の中で、唯一とっていいか分からないが評価できる部分は、障害福祉サービスを使う利用者全ての人たちに、担当の相談支援専門員がつくことだと思う。強制的に、サービス利用者と相談支援事業所が接触する機会を持つことができ、面談をして、お話をしなければいけないという状況になる。

そうすると、そういう相談をする機会がなければ、埋もれたままで誰も気づかないまま見過ごしてしまうようなニーズが、お話をしていく中でぼろっと出てきたりというように、隠れたニーズに気づけるチャンスができてきていると思っている。

東大和には、今、計画相談を実施している事業所は4カ所ある。その4カ所で、「計画相談支援事業所連絡会」、短縮して「計相連」を立ち上げている。

月に1回集まって情報交換などを行っているが、計相連の目的は、まずは何のために計画をつくるのか、計画をどのように活用していくのかという方向性を統一すること。

もう一つは、各事業所がつくる計画のレベルを統一すること。こっちの事業所ではよく話を聞いてくれたけど、あっちの事業所ではあまり聞いてくれなかったといったことがないように、計画をつくる上では、こういうことを注意していきましょう、大事にしましょうということ、毎月集まって確認するようにしている。

また、相談支援専門員にも得意、不得意があり、苦手な分野ではどのように対応すればよいのか、こういうニーズが出てきたときはどういう資源につなげればよいのかなど、皆さんそれぞれ悩みがある。毎月集まったときには、こういうことで悩んだけど皆さんどうしていますか、こういうときはどうしたらいいですかというように、お互いにアドバイスをして、スキルアップにつなげていけるようにしている。

また、情報交換をしていく中で、全ての事業所が共通して向かい合っている壁やニーズや困っていること、課題が出てくる。これは東大和に共通した問題だわかってきたときに、それを計相連として、一つの要望や提案書にまとめて、市に出してみるというアクションを起こすような活動もしている。

去年の7月から活動を始めたが、来年度以降は、計相連は自立支援協議会の部会として活動できる予定。

精神障害の方たちの支援についての連携では、「精神保健福祉関係者連絡会」（「精関連」）がある。私は直接関わっていないが、精関連に入っている方にお話を伺った。2ヶ月に1回、市内の就労系の事業所、グループホーム、ケアホーム、家族会や権利擁護

の団体、市役所、保健所、救護施設、病院などの機関が集まって、事例検討や、こういうときにはこういう支援をするべきではないかなど勉強会をしているとのこと。

地域のいろいろな団体と連携をとっていくのは大変な部分もあるが、絶対必要。生活部会の委員も、自分が関わっている活動はよく知っていても、異なる分野の団体のことはよくわからないという人もたくさんいるので、今年度は、地域の資源をよく知ろうというテーマで活動してきた。

今年度は、民生委員の方をお招きして、どういう活動をしているのかお話をしていたり、市内の事業所を見学に行き、どういう人たちに対してどういう支援をしているのか勉強させていただいたりもしている。

また、教育機関との連携も必要だと思う。人生は小さいころからお年寄りになるまでずっとつながっているもので、切れ目なく支援ができるように、そういう機関とも今後つながっていく必要があると自覚している。

地域移行、地域定着については、東大和では、まだまだ遅れているという現状がある。

本人に知的障害や重度の精神障害があり、家族が高齢になってきた場合、もうこの子は地域で生活するのは無理、施設に入れなければという流れになってしまっている。

世の中は施設から地域へ、病院から地域へという流れであるが、現実はなかなかうまくいかない。今後、本当に力を入れていかなければいけない部分と思っている。

市民だけでなく、行政も意識を変えていかなければならない。本来は、地域の中で生活が続けることが当然ということが前提にある。もっと、そのことを市の中に啓発していかなければならない。そこで、地域の中で生きていくためには、周りがどういう体制を整えなければいけないのかというテーマで、市民公開の勉強会をしたりしている。

また、現在は、病院、施設から地域に戻りたい人がどれだけいるのかというアセスメントができていない状況だと思う。どうしても、今地域にいる人たちへの支援で手一杯という現状もあり、病院や施設に相談支援事業所や専門員が出向いて行って、入所、入院されている人たちの気持ちをじっくり聞くということが、まだできていないと思っている。そういうアセスメントや、病院、施設に隠れて埋まってしまっているニーズをどう掘り起こしていくかということも、自立支援協議会としては今後もっと力を入れていかなければならないと思っている。

自立支援協議会は、どういうニーズを市の中の課題として挙げていかなければならないかを精査して、整理整頓して、解決する仕組みを作っていくための機関。私の個人的な気持ちや考え方だが、市内の障害福祉に関係する諸問題を、自立支援協議会が抱え込んではいけないのではないかとと思っている。市の障害福祉の問題を解決していくのが自立支援協議会の役目ではあるが、自立支援協議会だけに頼られては困る。それは少しおかしいのではないかとと思っている。

今社会の中で、バリアフリーがどんどん進んでいる。私が東大和で自立を始めたころは、全ての路線バスにスロープがついているわけではなかった。ついてないバスが止ま

ったときは、運転手さんに、ここまで行きたいのでお願いします、手伝ってくださいと声をかけて、お客さんと一緒に階段を運んでもらって乗っていた。

しかし、少しずつスロープがつき始めたら、スロープがついてないバスがバス停に来ると、運転手さんは、「次のバスにスロープがついてるんで、そっちに乗ってください」と言って、ドアを閉めて行ってしまう。次のバスまで10分、15分待たなければならないということが実際にあった。

そのことと自立支援協議会は、少し重なる部分がある。障害者の問題を解決するのは自立支援協議会。だから地域の人たち、近所の人たちが何か気づいても、その人たちは何も考える必要はなくて、自立支援協議会につなげて、そこで解決してもらえばいいというようになってしまうのが怖い。

障害を持った人が地域で生活をしていくことを考えたときに、やはりそれは障害者だけの問題ではなく、地域の問題、市民の問題であって、みんなが一緒に取り組まなければ根本的な解決にはならないと思っている。

だから、埋もれているニーズを掘り出して、集めて、集約して、整理することは、自立支援協議会が頑張らなければならないが、それを解決する力、取り組んでいく力は、地域に還元していかなければいけないと思っている。

協議会の役割は、ただ問題を解決するだけではなく、いかに東大和市の地域力を高めていけるかが最終的な目標だと思う。専門機関ができたからといってそこで抱え込むのではなく、いかに市民の人たちを巻き込んで、これはあなたたちの問題でもあるんですよということを投げかけて、一緒に協力してもらえるか。そういうことを目指して、今後活動していけるように、まだ軌道に乗っていない部分もあるが、皆様のご協力をいただきながら、活性化させていきたいと思っている。